

イギリスファシスト連盟およびオズワルド・モーズレーによる 非合理主義的美学要素の政治的利用の分析

竹本 智志[†]

An Analysis of the Political Utilization of Irrationalist Aesthetic Elements
by the British Union of Fascists and Sir Oswald Mosley

Satoshi Takemoto

1. はじめに

1930年代のイギリスファシスト連盟（British Union of Fascists (BUF)）に関する現在までの研究は、そのイデオロギーや組織構造の分析が中心であり、視覚的表象の検討には追加研究の余地が残されている。本研究は、BUFを率いたオズワルド・モーズレーのレトリック、制服、視覚デザインを分析し、ファシズム運動における非合理主義的な「美学」が果たした政治的動員の機能を明らかにすることを目的とする。

ファシズムの定義については、Nolte (1963/1965) や Payne (1980) らによる類型化の試みを経て、本稿の理論的枠組みは、ファシズムを「再生的超国家主義 (palingenetic ultranationalism)」を核とするイデオロギーとして捉えるGriffin (1993) の「ニュー・コンセンサス」に依拠する。この枠組みは、ファシズムを単なる権威主義やナショナリズムの亜種ではなく、既存の体制が「退廃」したという認識に基づき、国家の全面的「再生」を目指す、急進的かつトランサンショナルな政治運動として捉える視座を提供する。本稿は、この「退廃からの再生」というプロセスにおいて、政策提言もさることながら、「美学」がいかに非合理的な動員の推進力として機能したかを解明する。このアプローチは、ベンヤミンやモッセが体系化した「政治の美学化」という概念を、従来あまり注目されてこなかったイギリスの事例において再検討する試みでもある。

本稿の分析は、BUFの美学が持つ二重性、すなわち「イギリス固有の要素」と「トランサンショナルな要素」を明らかにする。第一に、イギリス固有の文脈である。BUFが用いた軍服調の制服「黒シャツ」は、19世紀末から米英の友愛結社や宗教団体において「サブカルチャー」として受容されていた軍服文化を、既存体制への「カウンターカルチャー」の装置として再発明した点にその特異性がある。

第二に、トランサンショナルな文脈である。BUFの機関紙*Action*の分析から、同運動がモーターサイクルや航空技術、流線型デザインといった「機械の美学」を多用していたことがわかる。これは、モーズレー自身が「時代の信条」と呼んだ、国境を超えたモダニズムと技術への憧憬を、政治的動員の非合理的な推進力として利用する戦略であった。

本稿は、この歴史的分析を通じて、「美学化されたイデオロギー」が持つ動員のメカニズムを解明する。そしてこの視座は、リバタリアニズム的な思潮が、同様に技術的進歩の美学を非合理的な推進力としうる可能性を検討する上で、重要な示唆を提供するものである。

2. 見せかけの合理と、非合理的本質

2.1 ポピュリズム的レトリックと「停滞感」の共有

オズワルド・モーズレーの政治運動は、戦間期イギリスが直面した経済危機と政治的停滞への「回答」として提示された。現存する彼の演説記録にも「何度も繰り返している通り／もはや毎度のことではあるが (again and again)」(British Movietone, 1931) というフレーズが繰り返しみられる。ここにみられる通り、モーズレーの政治活動は、国民が望む断固とした行動が議会によって阻害されているという「停滞感」を大衆と共有することから出発した。The Greater Britain (Mosley, 1932) の中表紙に「今度ばかりは、どうにかこの難局を切り抜けることすらできないのだ」と記されているように、世界の勢力図が変化するなか、この停滞感は未曾有の国家的な存立危機感として強調された。

この停滞の元凶として、彼は既存の二大政党（保守党と労働党）を「オールド・ギャング (The Old Gang)」と蔑称し、「国民を欺き、国民の行動への意志を麻痺させてきた」(Mosley, 1933, p. 92) と批判した。このポピュリズム

[†] 2024年度修了（人文学プログラム）

的なレトリックは、単なる政権批判に留まらず、既存の議会制民主主義そのものの抜本的な刷新、すなわち国家の「合理化」の要求へと結びついていく。

2.2 合理的経済政策とケインズとの共鳴

モーズレーの初期の主張は、経済的な合理性に裏打ちされていた。世界恐慌とイギリスの特権的経済地位の崩壊を背景に、彼はケインズとも通底する介入主義的な経済政策を提言した。モーズレーは、国際金融資本が実体経済を破壊していると批判し、「ウォール街の国際金融...（が）何百万人もの失業者を生み出したりする」(Mosley, 1938/2012, p. 3) と述べ、「科学的保護（scientific protection）」や「絶縁（insulation）」を主張した(Mosley, 1932; Mosley, 1938/2012)。「イギリス産品を買う国から、我々も買おう」(Mosley, 1932, p.135) というスローガンのもとに、帝国圏内の経済的自給自足（アタルキー）を目指したのである。

この国内需要重視の姿勢は、ケインズが1933年に「経済的ナショナリズム」を擁護し、「物品は自国産とし、金融は主として国内にとどめるべきである」(Keynes, 1933, p. 181) と述べた主張と、著しい類似性を持っていた。実際、BUFの中心的論客であるレイブン・トンプソン (1937) は、ケインズの著作『雇用・利子および貨幣の一般理論』を好意的に紹介し、投資の過熱や政府介入の必要性において、その主張とBUFの綱領との共通点を喧伝している。

しかし、この両者の決定的な分岐点は、ケインズが既存の政治システムの枠内での「合理化」を模索し続けたのに対し、モーズレーは経済問題の根源を政治システムそのものの致命的な機能不全にあるとみなし、単なる経済政策の提言を超えた体制変革へと傾倒していった点にある。

2.3 「第三の道」と「合理化された国家」

モーズレーの危機感には、オールド・ギャングの無能力そのもの他に、帝国の退廃が共産主義革命の火種となりかねないという意識が含まれていた。彼は、共産主義の暴力革命が「人口の半分ほどが飢え死にする」破滅的な結果を招く (Mosley, 1932, pp. 95-96) と警告し、かといって社会主義者の漸進的な改革は「時代がダイナミックであるという厳然たる事実」(Mosley, 1932, p. 93) に対応できないと断じた。「マルクス主義を打ち負かすために保守主義に頼れば、マルクス主義に打ち負かされることになる」(Mosley, 1932, p.81) との論にも見られる通り、モーズレーは現状維持（オールド・ギャングによる政治）も暴力革命（共産主義革命）も否定する「第三の道」の必要性を訴えた。この二重の脅威に対する唯一の解決策として彼が提唱したのが、秩序ある「コーポレート経済」であった。

この「コーポレート国家」を説くモーズレーの言説において特徴的なのが「科学（scientific）」「合理化（rationalise）」「機械（machine/machinery）」という語彙によるレトリックである。彼は、停滞した経済を立て直す

ため、エリートによる計画経済的な介入を「科学的な計画」と呼び、工業生産の効率化と同様に、政治システム自体も「合理化された国家」へと作り変える必要があると說いた (Mosley, 1932, p. 67)。彼が目指した「合理化された政治」とは、すなわちコーポラティズム（職能代表制）の導入に他ならない。地理的な選挙区ではなく職業的な利害に基づいて選出された議会による、より専門的で「科学的」な意思決定を遂げようとする試みである (Mosley, 1935)。

なお、ここでいう「機械」とは、「オールド・ギャング」に支配された非効率な旧来の政治機構 (political machine) と対比される、緻密かつ合理的・効率的な機械のように行動することができる統治機構 (Machine) という、美学的な理念であることに注意されたい。

2.4 合理性と軍事的美学との融合

この「合理」と「科学」を志向するロジックは、しかし、それと表裏一体の「軍事」という非合理主義的な美学と結びつくことで、大衆動員の性格を強めていった。モーズレーは「海外市場を待ち受ける鉄条網は、強力な砲撃によって撃ち抜くことができる」(Mosley, 1932, p.135) といった軍事的比喩を多用した。このレトリックは、BUFの視覚的象徴である「黒シャツ」と不可分に結びついている。

黒シャツ着用の目的は、表向きには階級間の障壁を壊すことだと説明された (Mosley, 1932)。だが、そのデザインは運動の発展と共に急速に軍服調へと遷移していく。1934年の集会では、すでにモーズレー自身が軍服調の制帽と乗馬ズボンの軍服を着用し、党員も規格化された制服と腕章を身につけて敬礼する様子が撮影されている（図1参照）。

このような視覚的效果は、BUFという組織の準軍事的なマナリズムを示している。服装にとどまらず、モーズレーのレトリックもまた「もし共産党員が現れれば、ファシスト・マシンガンを以てそれに立ち向かう」("Sir Oswald Mosley's Lively", 1934, p. 14) という直接的な暴力を示唆する内容へとエスカレートしていった。



図1 軍服調に規格化された「黒シャツ」に身を包み
モーズレーに敬礼するBUF党員たち

このように、モーズレーの大衆への訴求力は、ケインズとも比較しうる合理的な政策提言と、軍服と暴力的なレトロックが一体となった非合理的な美学の提示とを往復することで構築されていた。彼の提示した「合理化された機械(国家)」というビジョンは、実際には、黒シャツという非合理的な美学によって大衆の情動を動員することによってはじめて完成するものであった。

3. 制服のカウンターカルチャー的再発明

3.1 禁じられた制服への執着

モーズレーが黒シャツに固執したことは、1936年の治安維持法(Public Order Act)制定後の彼の行動からも明らかである。同法が政治的制服を禁じると、BUFは公的には着用の取り止めを余儀なくされた一方、モーズレーは表向きあくまで「新聞販売のための制服」であるという論理で、簡素化された「制服」の着用を続けた(“Sir O. Mosley sells”, 1937, p. 2)。この執着は、制服がBUFの内外に向けた宣伝ツールの最たるものであったことを示している。

BUFによる制服の採用は、必ずしも制服というカルチャーそのものを開拓する行為だったとは言えない。BUF以前の19世紀末から20世紀初頭の米英社会において、軍服調の制服はすでに広く受容された「サブカルチャー」であった。

3.2 軍服のサブカルチャー(1)：アメリカの友愛結社

BUFに先行するサブカルチャーとしての軍服文化に共通するのは、軍服が本来持つ暴力性を捨象し、社会秩序に順応・適応するための文化装置として機能していた点である。

アメリカでは、南北戦争後の「友愛の黄金時代」において、爆発的に増加したさまざまな友愛結社が軍装を採用した(Meyer, 1901)。例えば、1864年設立の「ピュティアス騎士団」は、古代ヨーロッパ的な儀礼を持つ一方で、服装の統一にあたっては近代的な軍服様式を積極的に導入した(Carnahan, 1888)。同団体の「制服階級」の統括者カーナハンは、「少将」の軍装でサーベルを構えた自身の肖像(図2参照)を著作の巻頭に掲げている。

また、「モダン・ウッドメン・オブ・アメリカ(MWA)」は、北米入植・開拓時代の木こりを象徴する「斧」をレガリアとしたが、近代軍服を身にまとい、儀礼・集会においては斧を小銃に見立て、軍隊式の「執銃時の敬礼」を行っていた(図3参照)。

これらの団体は、パレードなどを通じて「兵士として振る舞うこと」の魅力を一般市民に示し、軍服は社会的上昇の擬似体験や社会変動への集団心理的対応の装置として機能した。アメリカ陸軍の士官は、この魅力的な力が「わずか3年で、点在する少数の訓練部隊が2万以上の剣を持つ軍団へと変貌を遂げ」させたと、その大衆訴求力の高さを証言している(Thompson, 1888, p. 451)。軍服着用という行為は、急速な都市化や移民の増加(Chamberlain &



図2 軍装のカーナハン「少将」の肖像



図3 葬列で斧を掲げる MWA の会員たち

Yanus, 2022)の中で、社会規範の確認と集団帰属を可視化する装置だったのである。

3.3 軍服のサブカルチャー(2)：キリスト教的男性性

しかし、BUFの黒シャツにより直結する系譜は、イギリス固有の文脈に見出される。19世紀後半のイギリスでは、工業化に伴う都市問題への対応として、キリスト教勢力が軍装を積極的に採用した。ウィリアム・ブースが設立した「救世軍(Salvation Army)」は、貧困層への効率的な支援(Soup, Soap, Salvation)のために軍隊的組織編制と制服を導入した(Booth, 1890)。これに続いてウィルソン・カーライルが設立した「教会軍(Church Army)」もまた、彼自身が軍服を率先して着用し(図4参照)、制服としてもそのスタイルが採用された。

さらに、この流れは青少年教育にも波及する。「少年旅団(Boys' Brigade)」は、日曜学校の出席率低下に悩んだウィリアム・スミスが、キリスト教的規律と軍事訓練を融合させた組織であり、制服と模擬銃を用いた演習が導入された(Birch, 1965)(図5参照)。

これらの活動の思想的背景には、同時代に育まれた「キリスト教的男性性(Christian Manliness)」という理想像があった。これは、クリミア戦争の英雄の「殉教」がメディアを通じて理想化されたことで形成された。例えば、ヘドリー・ヴィッカース大尉の戦死を描いた伝記は、福音



図4 軍服とメダルを着用するウィルソン・カーライル



図5 制服を纏う南ロンドン少年旅団の少年たち

主義的信仰と軍務の調和的実践を描き、出版後1年で7万部を売り上げるベストセラーとなった (Broughton, 2015)。また、チャールズ・ゴードン将軍のハルトウームでの戦死は、彼を「善良なキリスト教徒」「優秀な軍人」「忠実な帝国臣民」という三位一体の殉教者として神格化した (Laffer, 2010)。Adonis (1965) が指摘するように、「兵士はよきキリスト教徒たりえる」という認識の支持要因となり、軍装はキリスト教的な社会福祉と宗教的実践のシンボルとしてイギリス社会に定着していった。

3.4 「退廃への不安」と「男性性の復活」

この軍装受容の背景には、ヴィクトリア朝後期からイギリス社会に蔓延していた「民族の退廃」への広範な危機意識があった。ボア戦争 (1899-1902) では、都市部の志願兵の多くが虚弱さを理由に不適格となり、ボイスカウトの創設者となるベーデン＝パウエルが「我々の人種の退廃」 (Baden-Powell, 1915, p. 177) と嘆くなど、国家の将来的な機能不全への懸念が広がっていた (Tanaka, 1995)。

また、1895年のオスカー・ワイルドの逮捕は、単なるスキャンダルを超え、「女々しい」都会的ダンディズムへの道徳的パニックを引き起こし、帝国の存続に関わる「男らしさ」の危機として認識された (Kaplan, 2004)。パブリック・スクールが「女々しい」知的活動への対抗軸として、スポーツを通じた「キリスト教的男性性」の涵養に努

めはじめたのも、この文脈においてである。

BUFはこの文脈を逆転させた。モーズレーは、社会適応的（サブカルチャー）であった軍服を、軍服が持つ求心力を逆手に取り、既存体制に敵対する「カウンターカルチャー」の装置として再発明したのである (Coupland, 2004)。黒シャツは、フロックコートやシルクハットに象徴される「オールド・ギャング」の政治家たちへの明確な視覚的アンチテーゼであった。

この戦略は、ヴィクトリア朝時代からの「民族の退廃」への不安とも呼応した。BUFの機関紙Actionは、「男性性の復活」と題した表紙（図6参照）で、兵士や体操する若者たちの肉体と並置するように、円盤投げという古代的な身体モデルを提示し、制服が担う「退廃からの再生」というGriffin (1993) のいう「再生的」な役割とその男性的身体性を暗示させた。

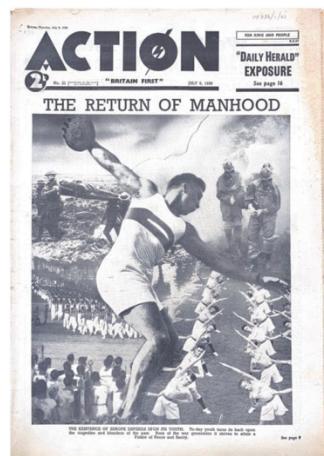


図6 表題「男性性への回帰」のコラージュ写真

とりわけ重要なのは、準男爵という貴族階級出身のモーズレー自身が軍服を纏ったことである。イギリスにおいて軍服と戦闘は伝統的に貴族の特権的営みであった (Yamada, 1994)。その貴族である彼が軍服を着ることは、「内部から貴族制の解体を志向する」という自己破壊的なイメージを演出し、彼をカリスマ的指導者として際立たせた。BUFの「劇場的」とも評された党大会は、旧社会へのカウンターという理念のもとに連帶した民衆の上に、エリートと民衆の境界を踏み越えたモーズレーが君臨するという図式そのものであった。こうして黒シャツとそれによって維持される強い男性性は、イギリス固有の階級意識と時代の不安感を背景に、言葉を超えた訴求力を生み出す戦略的な文化装置となつたのである。

4. 機械の美と国家を超えた「時代の信条」

4.1 トランスナショナルな視覚言語：ロゴ、光、歯車

BUFが利用した美学は、黒シャツというイギリス固有の文脈に留まらない。モーズレーが追求した「モダン」の精神は、国境を超えた同時代的な美学、すなわち技術への

イギリスファシスト連盟およびオズワルド・モーズレーによる
非合理主義的美学要素の政治的利用の分析

憧憬と強く結びついていた。

その象徴が、党的ロゴ「フラッシュ・アンド・サークル」である（図7参照）。モーズレーはこれを「結束（円）の中の行動（稻妻）」（Mosley, 1936/2006, p. 8）と説明した。世襲的権威を象徴するイギリスの伝統的な紋章（Honda, 1999）とは対照的に、このロゴは直感的・直線的であり、意図的に「モダン」なシンボルとして設計されている。



図7 BUF シンボル “Flash and Circle”

この「モダン」の志向は、*Action*のグラフィックデザインにも顕著である。同誌紙面上にみられるさまざまなモチーフは、政治的立場や国境を超えて共有されていたアル・デコ様式に強い影響を受けたものであると見られる。そのようなモチーフは、例えば1933年のシカゴ万国博覧会（図8参照）と、BUF幹部のレイブン・トンプソンが出版した*The Coming Corporate State*の表紙（図9参照）に見られる放射線状の直線的な光や直線的な建造物などの点に共通点が認められる。

ほかにも*Action*では、込み入った曲線の多い伝統的な街並みの闇夜を照らす直線的なサーチライトの挿絵や、機械のシンボルとしての歯車の挿絵など、直線的、機械的、産業的なグラフィック表現が用いられている。根源を辿れば、これらは同時代のマーガレット・バーク=ホワイトの工業写真や、チャップリンの『モダン・タイムス』に登場する巨大歯車とも共通する、機械文明の象徴的表現であった。しかし、こうしたモチーフが、先述の通り、たびたび強い男性性を備えた人物とともに描かれるという点に特異性が見られる。直線的なタッチ、歯車、 fascesとローマ式敬礼、そして機械と融合する裸体の男性像を描き入れ



図8 (左) : 「センチュリー・オブ・プログレス」1933年
シカゴ万国博覧会のシーズンチケット

図9 (右) : *The Coming Corporate State* の表紙

た*Action*の挿絵（図10参照）は、BUFの非合理的な美学要素を凝縮したものだと言えるだろう。



図10 機械のハンドルを握る裸体の男性の挿絵

4.2 技術への憧憬：機械と身体との融合

イギリスファシズムにおいて、無機的な「機械」と有機的かつ男性的な「身体」と融合する。その構図は、現実の事象と呼応し、またBUFおよびモーズレーの政治活動へと回帰する。

「機械と融合する」という、現代からすれば特異な身体性を示す一例として、BUFのモータースポーツへの視線が挙げられる。*Action*のスポーツ欄には、「観客ではなく、プレイヤーになれ」というスローガンのもと、ボクシングや柔術といった格闘技による身体の陶冶を推奨すると同時に、モータースポーツを「ファシズムの原則」に基づくものとして取り上げた（Dundas, 1936, p. 15）。マン島TTレースに象徴されるように、ライダーと機械が一体となるモーター・サイクル文化（Blankenship, 2013）が、ファシズムの理想とした「人間と機械との結びつき」による身体性と効率性の結合を体現していたからに他ならない。疾走する機械と一体化する情動的経験（affective experience）は、言語化し得ぬ非合理的な高揚感を提供したのである。

技術への憧憬は、航空機において頂点に達した。1930年代、大恐慌下の人々に希望を与えたのは、目覚ましい進歩を遂げる航空技術であった（SFO Museum, 2019）。*Action*にも「管制塔の下に（Under the Control Tower）」という専門欄が設けられ、新型航空機のお披露目（"The jumping giro", 1936）から民間航空路の拡大（"Air lines in", 1937）に至るまで、さまざまな航空関連のニュースがほぼ毎号掲載された。

こうした人々の航空機への熱情は、航空機というトピックそのものから乖離し、やがてその形状、すなわち流線型が航空機のような未来的・機械的なものの象徴として迎えられるようになる。航空機が生み出した工学的な「流線型」の美学は、ノーマン・ベル・ゲデスやレイモンド・ローウィをはじめとするアメリカのデザイナー達によって、本来その形状を必要としない自動車（図11参照）や鉄道、家電製品（図12参照）にまでことごとく適用されていった。

ゲデスは、航空機の美しさを「そのオブジェクトの目的



図11 ルレル・ギルドによるエレクトロラックス社の掃除機の流線形デザイン

に最も適した形態」であると述べ（Geddes, 1932, p. 20），機能性を超えた「未来への推進力」を象徴する「ストリームライン・モデルヌ」が世界的に受容された。

このようなデザイン思想は、単なる意匠の問題ではなかった。それは「アメリカ国民の精神を合理化する」というエリート的な道徳的規範意識（Maffei, 2009）に裏打ちされていた。そして、この思想は、エンジニア的エリートが国家を工学的に「チューニング」すべきと説いたアメリカのテクノクラシー運動（Miyamoto, 2002）と強く呼応している。政治機構（political machine）を、効率的な機械（Machine）へと作り変えるというこの思想は、モーズレーの「合理化された国家」という政治論理と、国境を超えて正確に重なり合う。

モーズレーは、ファシズムを「イギリスの国民性に合致した、イギリス的な方法によって、我々の時代の信条をイギリスにもたらそうとする」運動（Mosley, 1936/2006, p. 14）と定義した。彼にとって、イギリス的ファシズムの土台となるべき「時代の信条」とは、国境を超えて共有されたこの「モダニズム」と「機械の美学」に他ならなかったのである。

5. 結論：イデオロギーの美学化の現代的意味

本研究は、BUFの美学が持つ二重性、すなわち「イギリス固有の要素」と「トランサンショナルな要素」を明らかにした。第一に、モーズレーは、イギリスの階級意識や「男性性の危機」という固有の文脈を背景に、既存の「サブカルチャー」であった軍服を「カウンターカルチャー」の装置として再発明した。第二に、彼は、航空機や機械といった「モダニズムの美学」を、国境を超えた「時代の信条」として受容し、非合理的な動員の推進力とした。

1930年代のBUFの事例は、トランサンショナルな「合理」と「科学」の美学、および大衆の間に広がっていた技術への信頼と憧憬が、論理を超えた推進力として活用された様相を明確に示している。本研究の知見が示唆するのは、この「美学がイデオロギーに付加する大衆動員の力」というメカニズムの幅広い応用可能性である。

戦間期に航空技術が果たした役割と同様に、現代ではAIや航空宇宙技術の指数関数的な発展が、新たな思想的潮流の非合理的な推進力となっている。その代表が、シリコンバレーの起業家精神を基盤とする「新反動主義（neo-reactionism）」や「加速主義（accelerationism）」であり、これらは総じて「暗黒啓蒙（dark enlightenment）」と呼ばれる。

これらの思潮は、集権的な20世紀型ファシズムとは対極的に、一般的にはリバタリアニズム（自由至上主義）を志向する傾向がある。BUFが「オールド・ギャング」からの国家権力の奪取を目指したのに対し、暗黒啓蒙が共有するのが「〈声〉よりも〈出口〉」（Land, 2012/2020）と呼ばれる思想である。すなわち、既存の国家の枠内で改革を進め、異議を申し立てる（〈声〉をあげる）のではなく、そのシステム自体から離脱し（〈出口〉）、新たな統治形態を模索すべきだ、という意味である。

この思想の背景には、ピーター・ティール（Thiel, 2007）が9.11事件を契機に発表した、啓蒙主義的な合理的人間観（homo economicus）の限界についての論が存在する。彼によると、リバタリアンである彼らにとって、現代の世界および国家体制では、もはや自由と民主主義の両立は困難である。そしてその解決策は、改革という枠を遙かに超えた国家の「合理化」にある。カーティス・ヤーヴィン（Moldbug, 2007）は、国家を企業になぞらえ、また統治者と被統治者を株主と役員になぞらえる「新官房国家（neocameralist state）」を構想した。BUFの超国家主義が既存国家の「再生」を目指した（Griffin, 1993）のに対し、暗黒啓蒙は土地や民族に紐付いた国家を、もはや超克すべき対象としてすら認識しない。BUFの黒シャツが特定の「イギリス的」文脈（階級、貴族制）を踏まえてナショナリズムを力の源泉としたのに対し、暗黒啓蒙の美学は、むしろ特定の国民性に根差さず、グローバルなテック・エリートの行動規範を敷衍するためのツールとして国家という枠組みを捉えようとする。

このように政治的立場は対極にありながら、両者は「美学の利用」という一点で構造を共有しうる。ニック・ランドラが体系化した加速主義の根底には、「実現し得たはずのもう一つの『近代』 = 『未来』を取り戻す」（Kizawa, 2019）という「未来へのノスタルジー」が存在する。ティールが指摘したように、人々は「未来的であった過去」（『宇宙家族ジェットソン』や『スタートレック』といった1960年代のSF作品が描いた世界）へと戻りたいというレトロフューチャーの美学を持っている（Dowd, 2017）。そして、こうした未来的なライフスタイルが現代の加速度的な技術発展によってリアリティを帯びるなか、それを真に実現するためには、国家の利益と相反する巨大国際IT企業の行動規範によって成し遂げられるというものである。

1930年代の「機械の美学」がそうであったように、現代の「技術の美学」（AI, 宇宙開発, トランシーブーマニアズム）

ム）もまた、政治的立場とは無関係に、非合理的な動員の推進力として機能しうる。イーロン・マスクの呼びかけにより設立された米政府の「政府効率化省（DOGE）」構想（Honderich, 2024）は、リバタリアン的な合理化のビジョンと、大衆的なセンチメント、そしてテック・エリートとしての急進思想が、「レトロフューチャーの美学」のもとに融合しうる可能性を示している。

20世紀の先端技術がBUFの「時代の信条」となったように、21世紀の技術環境と美学が結びつく時、それは「ファシズム」とは全く異なる政治的信条の動員力となり得る。本研究の視座は、技術と結びついた美学が持つ、こうした非合理的な政治的含意を分析的に理解することの重要性を示している。

謝辞

本論文の執筆にあたり、指導教官である宮本陽一郎先生に心より感謝申し上げます。理系の学部出身である私に対し、先生は文系における研究のメソドロジーを一から丁寧に指導してくださいました。一連のご指導を通じて、私の中の学術的な態度が育まれただけでなく、知識を生み出す技術の習得と、研究というプロセス自体へ敬意を深めることができました。先生の御指導は、決して干渉しすぎることなく、しかし研究が道筋を必要とする重要な要所において常に的確なアドバイスをくださるものであり、まさに「心強い伴奏者」として私の研究を支えていただきました。ここに記して、厚く御礼申し上げます。

参考文献

- Air lines in 1937. (1937, January 2). *Action*, p. 10
- Baden-Powell, R. (1915). *Scouting for boys: A handbook for instruction in good citizenship* (7th ed.). C. Arthur Pearson Ltd.
- Birch, A. E. (1965). *The story of the Boys' Brigade*. Muller.
- Blankenship, P. D. (2013). *Gender, style, technology: The changing landscape of motorcycle culture* [Master's thesis, The University of Texas at Arlington]. UTA's institutional repository and archival hub.
https://mavmatrix.uta.edu/sociologyanthropology_theses/5/#:~:text=edu/sociologyanthropology_theses/5,-Download,-191%20DOWNLOADS
- Booth, W. (1890). *In darkest England, and the way out*. The Carlyle Press.
- British Movietone. (1931). Sir Oswald Mosley expounds creed, champion of new young socialism enlarges his manifesto [Newsreel]. AP Newsroom.
https://newsroom.ap.org/editorial-photos-videos/detail?itemid=b3f06d4dc14e27b5cb9c49be1798dd&media_type=video&source=youtube
- Broughton, T., (2015). The life and afterlives of captain Hedley Vicars: Evangelical biography and the Crimean war. *Interdisciplinary Studies in the Long Nineteenth Century*, 20(1), <https://doi.org/10.16995/tn.710>
- Chamberlain, A., & Yanus, A. B. (2022). Shaping the rise of brotherhood: Social, political, and economic contexts and the “golden age of fraternalism”. *Social Science Quarterly*, 103(7), 1673-1686. <https://doi.org/10.1111/ssqu.13222>
- Coupland, P. M. (2004). The black shirt in Britain: The meanings and functions of political uniform. In J. V. Gottlieb & T. P. Linehan (Eds.), *The culture of fascism: visions of the far right in Britain* (pp. 100-115). I.B. Tauris & Co Ltd.
- Dowd, M. (2017, January 11). *Peter Thiel, Trump's tech pal, explains himself*. The New York Times. <https://www.nytimes.com/2017/01/11/fashion/peter-thiel-donald-trump-silicon-valley-technology-gawker.html>
- Dundas, I. H. (1936 March 19). Motoring notes. *Action*, p. 15.
- Geddes, N. B. (1932). *Horizons*. Little, Brown, and Company.
- Griffin, R. (1993). *The nature of fascism*. Routledge. <https://doi.org/10.4324/9781315003627>
- Honda, M. (1999). Eikoku no monsho [Coat of arms in Britain]. *Lilium* (17), 1- 12. <https://doi.org/10.51095/lilium.17.01>
- Honderich, H. (2024, December 6). *What we know about Musk's cost-cutting mission*. BBC. <https://www.bbc.com/news/articles/c23vkd57471o>
- The jumping giro: The advantage of the autogiro – if it had come first – over the blackshirt camp. (1936, July 30). *Action*, p. 10
- Kaplan, M. B. (2004). Literature in the dock: The trials of Oscar Wilde. *Journal of Law and Society*, 31(1), 113- 130. <https://doi.org/10.1111/j.1467-6478.2004.00281.x>
- Keynes, J. M. (1933). National self-sufficiency. *Studies: An Irish Quarterly Review*, 22(86), 177– 193. [suspicious link removed]
- Kizawa, S. (2019). Beautiful harmony: Kasokushugi wa alternative na kindai wo shikousuru [Beautiful harmony: Accelerationism aims for alternative modernity]. *Shobunsha Scrapbook*. http://s-scrap.com/3041#_ftnref8
- Laffer, S. (2010). *Gordon's ghosts: British major-general Charles George Gordon and his legacies, 1885-1960* [Doctoral Dissertation, The Florida State University]. FSU University Library, Digital Repository. http://purl.flvc.org/fsu/fd/FSU_migr_etd-3319
- Land, N. (2020). *Ankoku no keimousho* [The book of dark

- enlightenment] (S. Kizawa, Trans.). Kodansha. (Original work published 2012)
- Maffei, N. P. (2009). Both natural and mechanical: The streamlined designs of Norman Bel Geddes. *The Journal of Transport History*, 30(2), 141-167. <https://doi.org/10.7227/TJTH.30.2.3>
- Meyer, B. H. (1901). Fraternal beneficiary Societies in the United States. *American Journal of Sociology*, 6(5), 646–661. [suspicious link removed]
- Miyamoto, Y. (2002). *Modan no tasogare: teikoku-shugi no kaitai to postmodernism no seisei* [The twilight of the modern : Transformation of U.S. cultures of imperialism and the birth of postmodernism]. Kenkyusha.
- Moldbug, M. (2007 August 16). Against political freedom. *Unqualified Reservations*. <https://www.unqualified-reservations.org/2007/08/against-political-freedom/>
- Mosley, O. (1932). *The greater Britain*. B.U.F. Publications.
- Mosley, O. (1935, March 11). These things need doing now. *The Daily Mirror*, p.12
- Mosley, O. (2006). *Fascism: 100 questions asked and answered*. Friends of Oswald Mosley (Original work published 1936)
- Mosley, O. (2012). *Tomorrow we live*. Black House Publishing. (Original work published 1938)
- Nolte, E. (1965). *Three faces of fascism: Action Francaise, Italian fascism, national socialism* (L. Vennewitz, Trans.). The New American Library. (Original work published 1963)
- Payne, S. G. (1980). *Fascism: Comparison and definition*. University of Wisconsin Press.
- SFO Museum. (2019, March 16). *Streamlines: Air age aesthetics for industrial design*. <https://www.sfmuseum.org/exhibitions/streamlines-air-age-aesthetics-industrial-design>
- Sir O. Mosley sells papers - for a “uniform”. (1937, January 28). *The Daily Mirror*, p. 2
- Sir Oswald Mosley's lively duel with K.C. in libel suit. (1934, November 6). *The Daily Mirror*, p. 14
- Tanaka, H. (1995). *Boy Scout: niju-seiki seishonen undo no genkei* [The Boy Scouts: the prototype of Twentieth-Century century youth Movement]. Chuoh-koron-Sha.
- Thiel, P. (2007). The Straussian moment. *Politics and Apocalypse*, 189-215.
- Thompson, J. (1888). Military value of the uniform rank. In J. R. Carnahan (Ed.), *Pythian knighthood: its history and literature* (pp. 451-463). The Pettibone Manufacturing Company.
- Thompson, R. (1937, January 30). Mr. Keynes and the coming slump: Is it conceivable that the government should do anything in time?. *Action*, 9.
- Yamada, M. (1994). *Igirisu kizoku: dandy tachi no bigaku to seikatsu* [The British nobility: The aesthetics and life of the dandies]. Sogen-sha.

図版出典

- 図1 : Central Press, “Oswald Mosley”, © National Portrait Gallery, London.
- 図2 : Carnahan, J. R. (1888). Pythian knighthood: its history and literature. The Pettibone Manufacturing Company.
- 図3 : Modern Woodmen Fraternal Financial , “Photograph of foresters offering salute”, Public Domain.
- 図4 : Bassano Ltd, “Wilson Carlile”, © National Portrait Gallery, London.
- 図5 : Fred C Palmer, “46 S London BB”, Public Domain.
- 図6 : Cadbury Research Library, Special Collections, University of Birmingham, *Action* (Jul, 9, 1936, p. 1), © Friends of Oswald Mosley.
- 図7 : R-41, “Flag of the British Union of Fascists”, Public Domain.
- 図8 : Chicago Public Library, “1933 Century of Progress World's Fair season ticket”, Public Domain.
- 図9 : Cadbury Research Library, Special Collections, University of Birmingham, *Action* (January 30, 1937, p. 12) [Advertisement of *The Coming Corporate State*]. © Friends of Oswald Mosley.
- 図10 : Cadbury Research Library, Special Collections, University of Birmingham, *Action* (October 17, 1936 p. 5) [Illustration for “The world of labour”], © Friends of Oswald Mosley.
- 図11 : Brooklyn Museum, “Lurelle Guild. Vacuum Cleaner”, Public Domain.